

千葉市感染症発生動向調査情報

2013年 第25週 (6/17-6/23) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数		25週	24週	23週	22週
上段:患者数	小児科	18	18	18	18
下段:定点当たりの患者数	眼科	4	5	5	5
	インフルエンザ*	28	28	28	28
	基幹定点	1	1	1	1

「定点当たりの患者数」とは報告患者数/報告定点数。

定点	感染症名	千葉市					千葉県
		注意報	6/17-6/23	6/10-6/16	6/3-6/9	5/27-6/2	6/10-6/16
			25週	24週	23週	22週	24週
小児科	RSウイルス感染症		1	0	2	0	10
	咽頭結膜熱		5	11	5	3	92
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		30	56	55	41	431
	感染性胃腸炎		79	108	131	153	843
	水痘		18	11	22	30	189
	手足口病	○	32	19	14	6	102
	伝染性紅斑		0	4	0	1	11
	突発性発しん		14	11	16	15	94
	百日咳		0	0	0	0	2
	ヘルパンギーナ		8	6	2	2	45
	流行性耳下腺炎		5	5	7	3	41
インフル	インフルエンザ*(高病原性鳥インフルエンザを除く)		2	8	10	12	31
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	0
	流行性角結膜炎		1	0	1	0	19
基幹定点	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0	0	0	0	0
	無菌性髄膜炎		0	0	0	1	0
	マイコプラズマ肺炎		0	0	2	0	2
	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	1	2	0	1

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患(16件)

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	20歳代	IGRA検査等	風しん	男性	10歳未満	病原体遺伝子の検出
結核	男性	20歳代	IGRA検査等	風しん	男性	20歳代	血清IgM抗体の検出
結核	男性	20歳代	IGRA検査等	風しん	男性	20歳代	病原体遺伝子の検出
結核	男性	80歳代	画像診断	風しん	男性	30歳代	血清抗体の検出
結核	女性	30歳代	IGRA検査	風しん	男性	30歳代	血清IgM抗体の検出
腸管出血性大腸菌感染症	男性	10歳未満	抗ベロ毒素抗体の検出	風しん	男性	30歳代	病原体遺伝子の検出
腸管出血性大腸菌感染症	男性	20歳代	病原体の検出及び	風しん	男性	30歳代	病原体遺伝子の検出
腸管出血性大腸菌感染症	男性	30歳代	ベロ毒素の確認	風しん	男性	30歳代	病原体遺伝子の検出

・結核5件(109)、腸管出血性大腸菌感染症3件(6)、風しん8件(184)の報告があった。

()内は2013年累積件数 ※ 累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第25週のコメント

<手足口病> 前週より増加し1.78となった。過去10年の同時期と比べると多い。

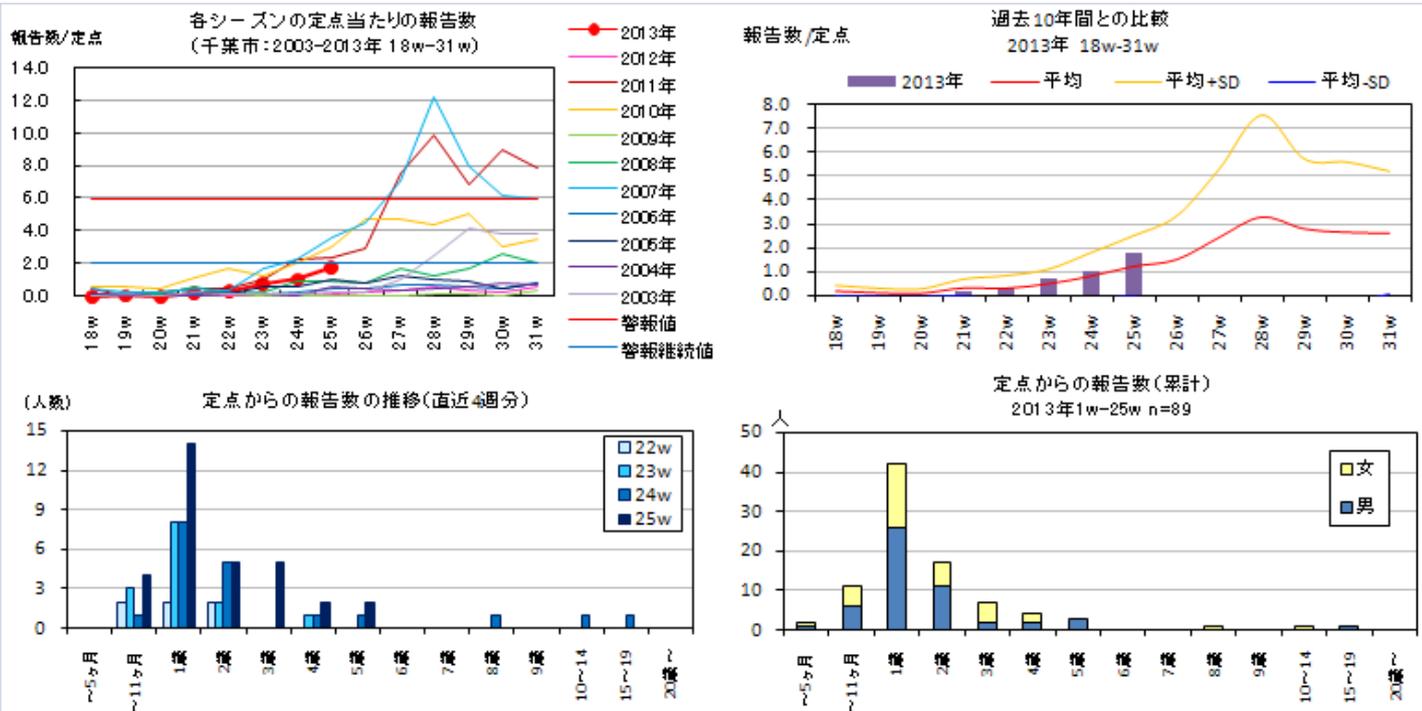
トピック

＜手足口病＞

2013年の全国レベルの第24週現在は、過去6年間の同時期と比較するとほぼ例年並みとなっています。都道府県別では、佐賀県、福岡県、熊本県の順に多く報告されています。千葉県は全国レベルと比べると少ない状況です。千葉市の第25週は前週より増加し1.78となり、過去10年間の同時期と比べると多めとなりました。区別の発生状況では、稲毛区と若葉区で最も多く、稲毛区の1歳及び3歳、若葉区の1歳及び2歳で最も多く発生しています。

手足口病は、口腔粘膜および四肢末端に現われる水疱性の発しを主症状とし、幼児を中心に流行する急性ウイルス性感染症です。主な原因ウイルスはコクサッキーA16(CA 16)、あるいはエンテロウイルス71(EV 71)です。感染経路は経口・飛沫・接触などで、潜伏期は3～4日が多く、主な症状が消失した後も3～4週間は糞便中にウイルスが排泄されます。まれに髄膜炎や脳炎などの合併があり、経過中の頭痛と嘔吐には注意が必要です。

これから流行シーズンを迎えるので感染防止に注意しましょう。ワクチンなどの積極的な予防方法は現在のところありません。経口・飛沫・接触感染を防ぐため、排泄物に対する注意や手洗い、うがいなどを励行しましょう。



＜梅毒＞

2013年の全国の累積報告数の第24週現在は438で、過去7年間の同時期と比較すると最多となっています。都道府県別では、東京都、大阪府、神奈川県に多く報告されています。千葉県は47都道府県中17番目となっています。千葉市の第25週現在の累積報告数は8で、過去10年の届出数の平均+SDを既に上回っており、多い状況となっています。年齢階級別では50歳代が最も多く、男性が5、女性が3となっています。

梅毒は、梅毒トレポネマ(Treponema pallidum)による性感染症で、主に菌を排出している感染者との粘膜の接触を伴う性行為や疑似性行為によって感染します。妊婦が感染すると、胎盤を通じて胎児に感染し、先天梅毒となります。潜伏期は3週間程度で、感染部位の病変を始めとして全身に至り、発熱、倦怠感、リンパ腺症、粘膜疹、扁平コンジローマ、脱毛、髄膜炎、頭痛などを起こし、その後神経症状等様々な症状が出現します。予防としては、感染者との性行為、疑似性行為を避けることが基本です。コンドームの使用は効果はあるものの、疫学データからすると淋菌感染症の場合ほどには完全でないとされています。

